

「着る」という神の恩寵的啓示

ベレーシート

●今回は、シリーズ「栄光と美を表わす聖なる装束」の特別篇として、神が罪を犯した私たちの身を覆う衣を着せてくださるといふ恩寵と、神のご計画におけるその漸次的啓示について学びたいと思います。幕屋において祭司として仕えるアロンとその子らに、神はアロンとその子どもたちに聖なる装束を着けさせて仕えさせました。それは、祭司の務めが人間の生来の力によってなされないためです。そのために彼らが着る装束は神の指示に従ってなされなければなりませんでした。

●旧約においては神の幕屋で仕える祭司たちが「長服を着る」という表現において、また、新約においては、主にある者たちが「キリストを着る」という表現において、神の恩寵が表されています。聖書がそれをどのように啓示しているかを、順を追って見てみたいと思います。ちなみに、「着る」というヘブル語は「ラーヴァシュ」(לָבַשׁ)、ギリシア語は「エンドューオー」(ἐνδύω)です。

1. 皮の衣

●神は人を創造し、その人(アダム)をエデンの園に置かれました。そのエデンの園の中で起こったすべての出来事はきわめてミステリアスです。つまり、創世記の1~3章におけるエデンの園でのすべての出来事には、神の救いのドラマのすべての要素が凝縮されています。つまり、神の似姿として創造された人間、神との親しい永遠の交わり、罪とそれによってもたらされた死の現実、と同時に、神のあわれみによる救いの福音がコンデンスされているのです。

●「エデン」(「エーデン」עֵדֶן)は、神が人との交わりのために前もって設けられていた場所でした。人はそこで神と交わり、息の合う愛のかかわりをもっていました。そこには何の隔ての壁もなかったのです。ここでは、人が生きるために必要なすべてのものが備えられ、美味しい食べ物は豊富で、しかも思いのままに食べることができ、すべてのことを「喜び、楽しむ」ことができるというまさに何不自由なく満たされたところでした。しかしそのエデンの園に悲劇が起こります。アダムとエバは蛇にだまされて、神から食べてはならないと言われていた「善悪の知識の木」から取って食べたことで、人類のすべての不幸が始まってしまいました。区別すべきことを区別しなかった彼らの神に対する不信と不従順により、罪と死が入り、その地は呪われてしまいました。

●地が呪われただけでなく、神と人とのかかわりにおいても大きな変化がもたらされました。その変化の一つは、人が「善悪の知識」に目が開かれたことです。これは人が善悪の基準を自由勝手に設定できることを意味します。それが神とのかかわりにおいて死をもたらすのです。罪を犯した人間のうちに最初に芽生えたのは羞恥心でした。彼らは自分たちの裸を覆うために「いちじくの葉」をつづり合わせて、自分たちの腰の

覆いを作りました。それは人が自らの罪や罪悪感(罪責感)を覆い隠そうとするすべての努力(営み)を象徴しています。それは、一時的には役立つかのように見えますが、いちじくの葉は夕方には枯れてしまい、すぐに役にたなくなってしまう。また、アダムが犯した罪によって地は呪われてしまい、刑罰的な意味を持つ「茨とあざみ」が多く生えるようになりました。「茨とあざみ」に共通するのは「とげ」です。そうした「とげ」から身を守る必要がありました。そんな彼らに対して、神はアダムとエバのためになんと「皮の衣」を作り、着せられたのです。ここには、罪と死によるとげから身を守るために、衣で裸をおおってくださったのです。

●「皮の衣」とは「動物の皮による衣」です。「皮」の原語は「オール」(עור)ですが、「衣」は「クットーネット」(כְּתוּנֶת)です。「衣」の「クットーネット」は「長服」を意味しています。これは父ヤコブが最愛の子ヨセフだけに作って着せた「長服」です(創世記 37:3)。そのため、「ヨセフの兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、穏やかに話すことができなかった」(同 37:4)ほどのすばらしい服だったようです。正確には、「ケトーネット・パッスィーム」כְּתוּנַת פָּסִיםで、「袖付の長い衣」を意味します。ちなみに、ダビデの娘タマルに着せた「長服」もこれです(IIサムエル 13:18)。やがてこの衣は、幕屋の礼拝において、大祭司や祭司たちが着る「装束」へとつながって行きます。このように、特別に愛された者、結婚前の王女、神と人との仲介的な務めをゆだねられた者たちが着る袖の付いた長服、これが「クットーネット」(כְּתוּנֶת)なのです。



長服

(下服)

●初出箇所の創世記 3 章 21 節の「着る」という動詞「ラーヴァシュ」(לָבַשׁ)は、使役形(ヒフィル形)が使われており、「着せる、まとわせる、覆い隠す」という意味になります。長服は人間の罪と罪の結果もたらされる人間の恥を「覆い隠す」だけでなく、また罪と死のとげから守るためのものでした。この「覆い隠す」という神の行為は、墮落した人間を再び建て直す神の恩寵を意味します。特に注目すべきことは、皮の衣を作るためには動物を屠って血を流す必要があります。神がアダムとエバに与えた衣は、血を流すことによって作られた「皮の衣」でした。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」(ヘブル 9:22)とありますが、いのちの代価である血によって罪が覆われるということが、「罪の赦し」なのです。これは、やがてキリストの十字架の贖いの血を信じるすべての者に与えられるキリストの「義の衣」「救いの衣」を予表しています。エデンの園でもそうであったように、すべてそれは神の一方的なあわれみによるものなのです。

2. 「着せられる」というさまざまなニュアンス

●旧約において「着る、着せる」を意味する「ラーヴァシュ」(לָבַשׁ)が、神の恩寵として使われている箇所をいくつか見たいと思います。すべて【新改訳 2017】からの引用です。

(1) 大祭司アロンと息子たちが祭司としての務めをするために「着せられた」聖なる装束(着物)

●幕屋で仕える祭司たちは、神から指定された装束を着ることなしに、主に仕えることばできませんでした。しかも、祭司たちが着る聖なる装束の一つひとつには、隠された象徴的な意味があります。これが、シリーズ「聖なる装束」で扱われる内容です。



- ① 出エジプト記 28 章 41 節 これらをあなたの兄弟アロン、および彼とともにいるその子らに着せ、彼らに油注ぎをし、彼らを祭司職に任命し、彼らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせ
- ② 出エジプト記 29 章 5 節 装束を取り、長服と、エポデの下に着る青服と、エポデと胸当てをアロンに着せ、エポデのあや織りの帯を締める。」
- ③ 出エジプト記 29 章 8 節 それから彼の子らを連れて来て、彼らに長服を着せる。
- ④ 出エジプト記 29 章 30 節 彼の子らのうちで、彼に代わって聖所で務めを行うために会見の天幕に入る祭司は、七日間、これを着る。

(2) ギデオンに注がれた「主の霊」という着物

【新改訳 2017】士師記 6 章 34 節

【主】の霊がギデオンをおおったので、彼が角笛を吹き鳴らすと、アビエゼル人が集まって来て、彼に従った。

●「おおった」というところが「ラーヴァシュ」(לָוַשׁ)です。主の霊がギデオンをおおったことにより、彼は戦いのリーダーシップを与えられて、敵に勝利します。主の霊が着物のようにギデオンを包み込んだのです。このことと同様なことが起ります。以下は、ルカの福音書 24 章 49 節に記されている復活されたイエシュアのことばです。

【口語訳】

見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい。

【新共同訳】

わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。

【新改訳 2017】

見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

【リビング・バイブル】

父が約束してくださった聖霊を送ります。しかし、聖霊がおいでになり、天からの力で満たしてくださるまでは、だれにも話してはいけません。この都にとどまっていなさい。」

●ここでの「着せられる」「授けられる」「覆われる」「満たしてくださる」は、ギリシア語の「エンデュオー」(ἐνδύω)が使われています。いと高き所からの力が着せられるまでは、私たちは何もすることができないというメッセージです。何もすることができないというのは、神のみこころになかったことをすることができないという意味です。また「着せられる」ことと、「とどまる」ことが密接なかかわりを持っていることがわかります。これはとても重要なことです。この箇所で一様に「とどまっていなさい」と訳されている動詞は「カスティゾー」(καθίζω)で、「座る、腰をおろす、腰を据えて留まる」という意味のアオリスト命令形です。これに相当するヘブル語は「神に立ち返る」の「シューヴ」(שׁוּב)、あるいは「座す、住む」の「ヤーシャヴ」(יָשָׁב)です。この二つのヘブル語は神とのかかわりを建て上げるうえでとても重要な動詞です。ちなみに、ギリシア語に「とどまる」という意味の「メノー」(μένω)があります。「カスティゾー」はある場所や位置から離れないでじっとそこで待つというニュアンスが強いのに対し、「メノー」は神と人との親しい人格的なかかわりを持つニュアンスです。

(3) 神の子であることを示す「着物」

●イエシュアはこんなたとえ話をされました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 22 章 11 節

王が客たちを見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない人が一人いた。

●婚礼に招待された人々の中に、一人だけ、婚礼の礼服を着ていない人がいたのです。そこで王は、『友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。』と尋ねます(マタイ 22:12)。おそらく、この人は、自分が着ているそのままの服装で王様の宴会に出席できると思ったのです。しかし「彼は黙っていた」とあります。なぜなら、弁解できなかったからです。

●そこで王は召使たちに、『この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。この男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる。』と命じました。御国の食卓に与ることのできる条件はただひとつ、婚礼の礼服を着ていることです。しかもその礼服とは、キリストを信じる者に無条件で与えてくださる**義の衣、救いの衣**だと考えられます。

●放蕩息子のたとえ話(ルカ 15 章)では、放蕩した後に帰ってきた息子に対して、父はしもべたちに命じます。『急いで一番**良い衣**を持って来て、この子に着せなさい。』と。ここでの着物も、やはり「キリストの義」を指し示しています。使徒パウロはこれを、「キリストを着る」「新しい人を着る」と表現しています。

3. パウロの言う「着る」という概念

●新約の使徒たちの中でも、「着る」(「エンデュオー」(ἐνδύω))という語彙を最も使っているのは使徒パウロです。しかもその使い方には微妙な違いがあります。その一つは、洗礼にあずかった者は、キリストを自らその身にきたたのです(アオリスト=過去)という「**すでに**」の恵みです。その恵みを土台として自発的、主体的な命令(促し)がなされます。もうひとつは、「**いまだ**」の恵みで、それはキリストが再臨され時に着る恵みであり、「朽ちることのない着物を身に着る」ことを意味しています。

(1) 「すでに」の恵みとして (アオリスト・中態)

【新改訳 2017】カラテヤ人への手紙 3 章 27 節

キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、**キリストを着た**のです。

【新改訳 2017】コロサイ人への手紙 3 章 10 節

新しい人を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたちにしたがって新しくされ続け、真の知識に至ります。

(2) それゆえ、「キリストを着なさい」(アオリスト・命令形)

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 13 章 14 節

主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。

【新改訳 2017】コロサイ人への手紙 3 章 12 節

ですから、あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を**着なさい**。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 6 章 11, 14 節

11 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に**着けなさい**。

14 そして、堅く立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを**着け**、

(3) 「いまだ」の恵み

●ここで扱う恵みは、これからの恵みです。「すでに」の恵みの他に、「いまだ」の恵みがあるのです。使徒パウロはこの恵みにあこがれていました。

【新改訳 2017】I コリント 15 章 53, 54 節

53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず**着る**ことになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず**着る**ことになるからです。(同義的パラレリズム)

54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを**着て**、この死ぬべきものが死なないものを**着る**とき、
このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に?み込まれた。」（同義的パラレリズム）

● II コリント 4 章～5 章はそのことが強調されています。パウロは 4 章 18 節で「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」と述べた後で、不思議な表現をするのです。

【新改訳 2017】 II コリントへの手紙 5 章 1～7 節

- 1 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。
- 2 私たちはこの幕屋にあつてうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。
- 3 その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態であることはありません。
- 4 確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負つてうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって?み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。
- 5 そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは、神です。神はその保証として御霊を下さいました。
- 6 ですから、私たちはいつも心強いのです。ただし、肉体を住まいとしている間は、私たちは主から離れているということも知っています。
- 7 私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます。
- 8 私たちは心強いのですが、むしろ肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。

●この箇所はじっくりと学びたいと思います。まず、この箇所は将来に備えられている恵みです。「御国の福音」です。「**私たちの住まいである幕屋**」とは何でしょう。それは私たちの「からだ」です。その「幕屋が壊れて」とは「肉体の死」を意味しています。たとえ肉体的な死を経験したとしても、「私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない**永遠の住まい**」があることを私たちは知っているとしています。「知っている」とは、信仰によって確信しているということです。「幕屋」「建物」「住まい」と言葉は異なりますが、それは神と人とがともに住む家のことを言っています。「**神の下さる建物**」のことを、「**人の手によらない、永遠の住まい**」、「**天から与えられる住まい**」と言い換えながら(パウロはあるひとつの事柄を別のことばで言い表すユダヤ的修辭法の達人です)、そこに注意を向けさせています。そしてパウロはそれを「**着たい**」と望んでいるのです。

●「住まい」を「着る」というような表現は、日本ではありえない表現だと思いませんか。これはパウロにしてみれば、ぜんぜんおかしくないのです。なぜなら、「着る」という発想は、「覆う」という概念で理解されているからです。創世記 2 章 21 節の「皮の衣」がそうでした。それはアダムとその妻のからだをおおうためのものでした。衣服も住まいも「覆う」という発想を持っているからです。それに引き替え、私たちの必要最低限の保障を「衣・食・住」ということばで表わします。これら三つが保障されることで安心だと考えます。ところが、イエシュアが語った話の中には、なぜか「住」という語彙がないのです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 6 章 25、31 節

25 ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配し

たり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。

31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。

●「何を食べようか何を飲もうか」というのは「食」のことです。そして「何を着ようか」というのは「衣」のことです。では、「住」は ?? 「衣」と「住」はひとつだということなのでしょう。パウロは、「私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持つて出ることもできません。**衣食があればそれで満足すべきです。**」(I テモテ 6:8)と愛弟子のテモテに語っています。とすれば、イエシュアやパウロは「住」について軽く考えていたのでしょうか。いいえ、むしろ反対です。イエシュアが最後の晩餐の中で何と言われたかを見てみましょう。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 14 章 1～3 節

- 1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
- 2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。
- 3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

●ここでは「住」についてイエシュアがはっきりと語っています。また使徒パウロも、Ⅱコリント 5 章 3～4 節で「住」について語っているのです。

- 3 その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。
- 4 確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために、**天からの住まいを上に着たいから**です。

●パウロのうめきは、私たちのうめきとは異なります。天からの住まいを着たいゆえのうめきなのです。神とともに永遠に住む家(建物)は、人の手によらない住まいなのです。その住まいは神の恵みによってすでに保障されていますが、「いまだの恵み」です。それゆえ、パウロははっきりと勧めています。「こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、**上にあるものを求めなさい。**」(コロサイ 3:1)。このパラダイムにシフトする(転換する)ことこそ、「御国を受け継ぐ者たち」、「御国を慕い求める者たち」の靈性と言えるのではないのでしょうか。この靈性を、キリストの花嫁である教会が回復しなければならないのではないのでしょうか。

2016.9.4(2020.8.5 改訂)